9　外国語（英語）

主体的なアウトプットを引き出すための工夫
―CLIL 指導を目指して―

宇田　竜子

本論の要旨

来年度からの小学校外国語科全面実施を前に,スムーズな小中接続に向けての中学校英語教育の改善は必須であり,英語で英語を教える授業が求められている。筆者はこれまで,英語で英語を教える授業を行うために,生徒にいかなる英語インプットを行うかの研究を続けてきた。しかし最近は英語で教える内容自体を,より充実させる重要性を感じている。英語による知識インプット型の授業から,良質な教材を材料とし,英語を手段として「使いながら学び,学びながら使う」授業へと変えていく必要性を感じている。

そこで,本年度の研究では,学習言語で学び学習言語を使いながら,同時に世界の様々な国の文化や歴史,社会的な問題についても考えていく指導法である Content and Language Integrated Learning（以下,CLIL）を授業に取り入れた。教科書本文内容を指導の中心題材としながらも,生徒の関心の幅をさらに広げていくことに力を入れた。題材を文法学習のために使うのではなく,題材内容に,よりフォーカスすることで,生徒の「知りたい」「理解したい」という気持ちを高め能動的なインプットをさせる。さらにインプット内容から考えたことを元に「伝えたい」という気持ちを高め,主体的なアウトプットにつなげたいと考える。1 年間 CLIL 指導を取り入れた指導を重ねることで,筆者は今後の新たな指導の指針を得ることができた。

キーワード　CLIL,能動的なインプット,主体的なアウトプット, 小中接続

1.はじめに

2021 年度に全面実施される新学習指導要領において,英語で英語を教えることが基本方針であることが記載されている。筆者はこれまで,英語で授業を行うためにインプットの工夫を行ってきた。視覚補助としてジェスチャーと画像を取り入れることで,生徒たちは次第に筆者の話す英語を理解できるようになってくる。1 学期が終わるころには,一通りの教室英語を理解するようになる。しかし問題は次の段階にあり,限られた時間の中で抽象的な事柄や内容を英語のみで理解させるという部分であった。筆者は過去にも,長文などの内容理解を All in English での指導を試みたが,満足のいく指導とならないことが多かった。

そこで本年度は CLIL の手法を取り入れることにした。CLIL とはヨーロッパで広まっている指導法であるが,近年日本でも英語教育にその指導法が取り入れられつつある「内容統合型学習」である。言語と同時に他教科などの内容教育を統合した指導を行うことができる。CLIL の主な特徴は,4 つの C と呼ばれる構成要素である「Content:教科やテーマに関した内容」,「Communication:言語学習」,「Cognition:学習者の思考活動」,「Culture/Community:異文化や国際理解と協働の学び」,が指導に入っていることである。4 つの C が有機的に結びつけられ統合された指導が CLIL である。

英語科の検定教科書には各国の歴史や文化,社会的な問題などが題材として掲載されている。その良質な内容を柔軟に活かしたり,さらに発展させたりしながらインプットをすることで,思考活動を促し,主体的なアウトプットにつなげていきたいと考えた。

以下に CLIL の 10 原則（和泉 *et al*,2012）を引用する。

CLIL の 10 原則

①内容学習と語学学習の比重は 1：1 である。
②4 技能（読む・聞く・書く・話す）をバランスよく統合して使う。
③タスクを多く与える。
④さまざまなレベルの思考力（暗記,理解,応用,分析,評価,創造）を活用する。
⑤協同学習（ペアワークやグループ活動）を重視する。
⑥異文化理解や国際問題の要素を入れる。
⑦オーセンティック素材（新聞,雑誌,ウェブサイトなど）の使用を奨励する。
⑧文字だけでなく,音声,数字,視覚（図版や映像）による情報を与える。

⑨内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する。
⑩学習スキルの指導を行う。

2. 研究方法

年間を通し,CLIL10 原則に則った形で授業を構成し実施する。筆者の本年度の受け持ちが 1 年生と 3 年生であることから,両学年において CLIL 指導を行う。なお CLIL 指導にはソフト CLIL からハード CLIL まで幅があり,その取り入れ方は指導者に委ねられる。よって CLIL 原則に従っているか否かは筆者の判断である。

指導後,筆者が行った CLIL 指導が生徒の能動的なインプットと主体的なアウトプットにつながったかどうかを,生徒の成果物とアンケート結果から分析する。

3. 実践事例

ここでは,本年度 8 月の研究発表会・公開授業で実施した 1 年生の授業と,通常授業の中で行った 3 年生の授業を 1 つずつ記す。

3.-1 1 年生

(1) 単元

「Lesson 4 Field Trip」

(2) 単元設定の理由

CLIL 指導の 4 要素からは,「Content:教科やテーマに関した内容」として,単元テーマを「滋賀県の観光地」とした。教科書単元が「Field Trip」であることから,小学校外国語活動で 2018 年度から使用されている文科省作成の副教材「We Can!②」の既習内容である Unit4 の内容と関連させた。題材終末は環境問題に触れられていることから,琵琶湖の外来魚問題について画像を見せながら簡単な英文で紹介した。「Culture/Community:異文化や国際理解と協働の学び」の要素としては,1 時間目に滋賀県の古くからの観光地である竹生島を題材にして複数形指導を行った。3 時間目は,滋賀の複数の観光地を英語で紹介した。その後,班別で,滋賀県の観光地を外国人観光客に紹介するならどこにするか,を決めた。「Communication:言語学習」では,授業者が言う観光地に関する英文を聞きながらの文法学習や,県内の有名施設等への行き方を英語で聞いて,その動作をする TPR 活動などである。県内の観光地について学んだことを紹介する内容も入れた。「Cognition:学習者の思考活動」の要素としては,自分たちが調べた観光地をどのように外国人観光客に英語で説明するか,また自分が外国人観光客ならどのような応答をするか,を考えた。単元のまとめとしては,紹介する観光地の案内ポスターを英語で書くことを設定した。

以上のように,本単元の題材と題材から発展させた内容学習,そしてターゲット文法を関連付けながら CLIL 指導ができるよう結び付けた。

(3) 単元の学習目標

①滋賀県の観光地の写真から見えるものを複数形,単数形,命令文を意識して英文にすることができる。
②滋賀のお勧め観光地について英語で伝えることができる。

(4) 単元の評価規準

①【知識・技能】複数形や数の尋ね方,命令文に関する知識を身に付けている。
②【思考力・判断力・表現力】観光地を英語でわかりやすく伝えている。
③【主体的に学習に取り組む態度】間違うことを恐れず積極的な態度で発表しようとしている。発表内容を積極的な態度で聞き,適切に応答している。

(5) 単元の学習計画

課	時	学習活動
L4 1 2	1	【複数形,How many～?】 （題材:滋賀の観光地） 1)ターゲット文法を理解する。 2)ターゲット文法を英文中で使う。 3)発表する観光地を班で決定する。
L4 1 2	2	【複数形】 1)Lesson4 part1,part2 の内容を理解する。
L4 3	3	【命令文】 （題材：町にあるもの/滋賀観光地） 1)ターゲット文法の内容を理解する。 2)発表する観光地についての原稿を画用紙に書く。
L4 3	4	【複数形】 1)Lesson4 part3 の内容理解をする。
L4	5	【班発表】 1)滋賀の観光地を班発表しよう。 2)発表を聞いた後質問を考えよう。
L4	6	【書く】 1)級友からの質問の答えを加え行きたい度が増すような観光地ポスターを作ろう。

(6) 本時の学習過程

	学習内容・活動
導入	1. Greeting ・教師や生徒同士で挨拶をする。 2. Small talk ・質問をして互いに会話を続ける。 3. 復習（命令文と小 6 での既習英語） ・TPR 活動 4. 帯活動（Interactive Practice）
展開	5. 【班発表】 ・3 班 1 組でやりとりを交えた発表をする。 ・A 班：発表班→自分たちから声を掛ける。 ・B 班, C 班：外国人観光客役班→発表班 ・発表が終われば, 評価（行きたい度）, 質問を書く→同時に各組で 3 班分行う。 6.【全体発表（代表班 3 班）】 ・教師がコーディネート役, 生徒が外国人観光客役になり発表班を決める。 ・教師の仲介で 3 班が発表をする。 ・行きたい度, 質問を書く。
まとめ	7. 振り返り ・行きたい度が増した班の発表について, その理由を書く。

(7) 生徒の成果

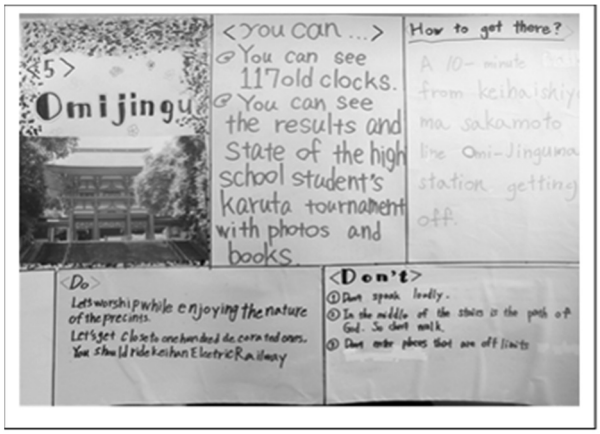


図 1　観光地案内ポスター（生徒作成）

(8) 参観者と指導助言者の主な意見

参観者

○テンポや雰囲気の良い授業であった。
○生徒たちが積極的に英語で反応をしていた。
○対話を継続させようとする生徒が多かった。
△行きたい度が増すというのは, どのような観点からなのか, ポイントを明確に示すべきであった。

指導助言者（滋賀大教員, 県教委指導主事）

・英語学習初期である中 1 生が積極的に多くの英語を話し,実物を見せながら,やりとりを続けようとしていたことが素晴らしい。
・この 1 時間で何が出来るようになってほしかったのか,授業前と授業後でどんな生徒の変容を望んでいたのかが分かりにくかった。

(9) 授業を終えて

今回の授業では, 小中接続の観点から意図的に小学校での既習単語と既習文型を入れた。このことから小学校で学んだ内容を思い出すことができた生徒が多かった。言葉を獲得する際, 同じ語に複数回出会う必要がある（Nation, 2001）。遭遇数については研究により異なるが, リーディングの中で遭遇する場合は 6 回から 20 回以上という研究結果がある。生徒が小学校で聞いた英単語を, 意図的に中学での授業において聞かせたり読ませたりすることで遭遇数を高めることはこれからも継続していきたい。

CLIL 的な観点から授業を振り返ると, 10 原則は概ね達成できた。下に, 各原則についての確認をする。

①内容学習と語学学習の比重は 1:1 である。

滋賀の観光地についての視覚補助を与え,英語で指導（内容学習）をしながら 3 つのターゲット文法の指導や教科書の語彙練習活動,文型練習活動（語学学習）を行うことができた。

②4 技能をバランスよく統合して使う。

言語習得理論上,「聞く」「話す」が習得順として「読む」「書く」よりも先になる。よって英語学習初期段階では自然と「聞く」「話す」の比重が「読む」「書く」よりも高くなる。「聞く」は授業者の英語による滋賀の観光地紹介や教科書内容を聞くことによって,「話す」は観光地紹介を英語ですることや,外国人観光客として英語で反応することを通して使うことができた。「読む」は教科書本文を読むことで,「書く」は単元まとめにおいてポスターを書くことにおいて達成できた。学習初期段階であることを考えるとバランスよく統合できたと考える。

③タスクを多く与える。

全生徒が 2 通りの立場を経験するタスクを与えた。両者が英語での対話を通して「外国人観光客がこれから訪れる滋賀の観光地を一緒

に決める」がタスクにあたる。

④さまざまなレベルの思考力（暗記，理解，応用，分析，評価，創造）を活用する。

全ての思考力を活用出来たと考える。「暗記」は通常の語彙や文型の帯活動から，「理解」は教科書内容理解や授業者による英語インプット理解などで行えた。「応用」としては決められた会話例をベースにしながらも対話内容を半即興的に考え発話した。「分析」「評価」としては観光地紹介者が行った発表を評価する活動を行った。「創造」としては観光客を惹きつけるポスター作成を行えた。

⑤協同学習を重視する。

「暗記」や「理解」においてはペア活動，「創造」においては4人グループでの活動を行った。

⑥異文化理解や国際問題の要素を入れる。

会話練習時に外国人観光客の出身国のバリエーションを変え，その国の特徴や知っていることを共有する場を設けた。

⑦オーセンティック素材の使用を奨励する。

滋賀県の人気観光地ホームページの英語版をスクリーンで紹介した。このことで，外国人観光客用に英語で書かれた観光地パンフレットを手に入れてきたり，英語で書かれた観光地案内をインターネット上で探し，プリントアウトしてきた生徒が複数いた。

⑧文字だけでなく，音声，数字，視覚による情報を与える。

視覚情報を画像で与えた。英語で話す時はジェスチャーを入れるなどの工夫をした。

⑨内容と言語の両面での足場を用意する。

シンプル化したり図式化したり模範を示したりなどの足場掛けを行った。

⑩学習スキルの指導を行う。

語彙の調べ方や，情報収集の仕方，対話練習の仕方などの指導を行った。

原則を意識しながら単元指導を行った結果，CLIL指導を入れながら学習目標は達成できたと考える。しかしながら(6)に示した指導案による授業実施後の生徒の振り返りからは次のような感想があった。

・話しかけられた時には，しっかり英語で反応できた。もっと他の反応ができたら良かった。
・伝えられない英語がたくさんあったので，もっと英語を話せるようになりたいと思った。

生徒たちが出来たと感じていることも記述には多くあったが，「言いたいのに言えなかった」という思いを感じた生徒も多かった。授業者は「シンプルな英語で表現する」「出来るだけ知っている語彙で伝える」という助言を事前に与えたが，生徒の伝えたい気持ちの方が勝った結果であった。このような「言いたいのに言えない」というギャップは言語習得理論上「気づき仮説(Schmidt1990.19993)」と呼ばれ，その経験は後の習得を促すと言われている。しかし，授業者としては班発表というアウトプットの場では達成感を得て欲しかった。

授業者の今後の課題は，特に英語学習初期者への指導において，伝えたい多くの情報をシンプルに表現する方法を具体的に分かりやすく教えることであると感じた。

3.-2 実践事例

(1)単元

New Crown 3「Lesson 6 I Have a Dream」

(2)単元設定の理由

教科書単元の題材は「I Have a Dream」であり，内容は，キング牧師のスピーチを据えたアメリカの公民権運動の歴史である。

CLIL指導の4要素からは，「Content:教科やテーマに関した内容」として，CLIL指導主テーマを「・アフリカ系アメリカ人の歴史・人権問題・アメリカの公民権運動」とした。教科書本文を掘り下げるため，アメリカの歴史を遡ることで，より背景に迫りたいと考えた。生徒が教科書内容を「自分とは無関係の過去の異国での出来事」だと思うことのないよう工夫をした。「Culture/Community:異文化や国際理解と協働の学び」については，アメリカの歴史がテーマであることから自然とこの要素は入る。

「Communication:言語学習」については，授業者による英語インプットがターゲット文法を入れたものになるよう工夫した。単元の出口の課題として「尊敬する偉人を班で発表する」を設定した。生徒は一人ずつ，原稿を書いた後スピーチメモを作成し発表した。また教科書のみならず，洋書の一部を読ませ内容理解活動を行った。発表後は班員からの英語の質問に英語で答え，発表内容について相互評価を行った。「Cognition:学習者の思考活動」の要素としては，「自分がその時代に生きている黒人であるならどう行動するか」を考えさせたり，「なぜ差別が生まれるのか」を考えさせ，思いを綴らせた。その後，自分たちの思いを伝えあった。単元のまとめとして，班員のスピーチ発表を聞いて考えたことを書いたり，質問を書いたりさせた。

(3) 単元の学習目標

①アメリカの公民権運動の歴史を知る。

②尊敬する偉人について英語で伝えることができる。

③後置修飾を理解して活用する。

(4) 単元の評価規準

①【知識・技能】後置修飾を理解して活用する。

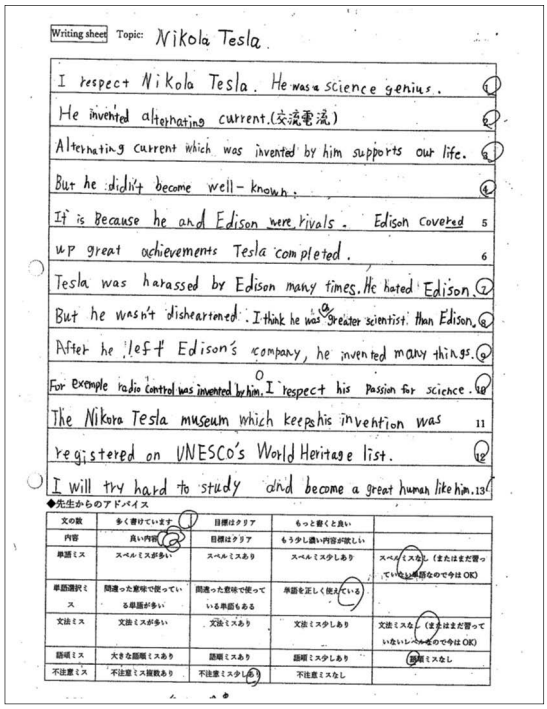
②【思考力・判断力・表現力】公民権運動の歴史を要約し年表にする。

③【主体的に学習に取り組む態度】尊敬する人物についてオーディエンスに伝わるスピーチができるよう工夫する。

(5) 単元の学習計画

課	時	学習活動
L6 1, 2	1	【1950 年代のアメリカへタイムスリップしよう】（教材：白人専用のレストランや店,暴力を受けた黒人の写真など） 1)英文を聞き写真の中では何が行われているかを知る。【後置修飾】 2)差別について何を思うか,を話し合う。
L6 1, 2,	2	【アメリカの黒人差別がなぜ生まれたのかを考えよう①】（教材：Martin Luther King, PENGUIN READERS） 1)教材を読み,学習班で年表を作ろう。
L6 1,	3	【1950 年代のアメリカ】 1)タブレットを使用して,後置修飾について分かりやすくまとめよう。 2)1950 年代のアメリカの黒人差別を表した写真を,後置修飾を使って英語で描写しよう。
L6	4	【アメリカの黒人差別がなぜ生まれたのか考えよう②】 1)「目の色で変えられた教室」（20 分）を視聴する。 2)視聴した動画から,差別が生まれる理由を考えて書く。 3)もしも自分が差別されている黒人であるならば,闘うか,我慢するかを考えて書く。
L6	5	【闘った黒人たちの生き方を知ろう】 1)闘う？我慢する？意見交流をする。 2)バスボイコット運動の始まりから法改正までを時系列順にカードを並べ替えよう。（ペア）
L6	6	【ローザの生き方,キングの人生】 1)知ってるつもり「非暴力,不服従-ガンジーとキング牧師-」（DVD）視聴する。 2)EJ シート-Lesson6 Part1,2-を使用して,本文内容を理解しよう。（ペア）
L6 R	7	【キングの夢】 1)EJ シート-Lesson6 READ-を使用して,本文内容を理解しよう。（ペア） 2)キング牧師による”I Have a Dream”スピーチを視聴する。
L6 R	8	【Lesson6　内容理解】 1)内容理解プリントに取り組む。 2)答え合わせをする。（学習班）
L6	9	【Lesson6 まとめ】 1)Ebony and Ivory のディクテーションをする。 2)歌詞は何を意味しているか考える。 3)翌授業の予告をする。
L6	10	【尊敬する人物について書こう】 1)授業者の尊敬する偉人のスピーチを聞く。 2)尊敬する人物について原稿用紙に書いて提出する。
L6	11	【尊敬する人物の発表練習をしよう】 1)原稿から発表用メモを作る。 2)ルーブリックを共有する 3)発表練習をする。
L6	12	【尊敬する人物を班で発表しよう】 1)原稿を見ずにメモのみを見て発表する。 2)1 人 2 回は必ず英語で質問をする。 3)発表者の評価と自己評価をする。

(6) 生徒の成果

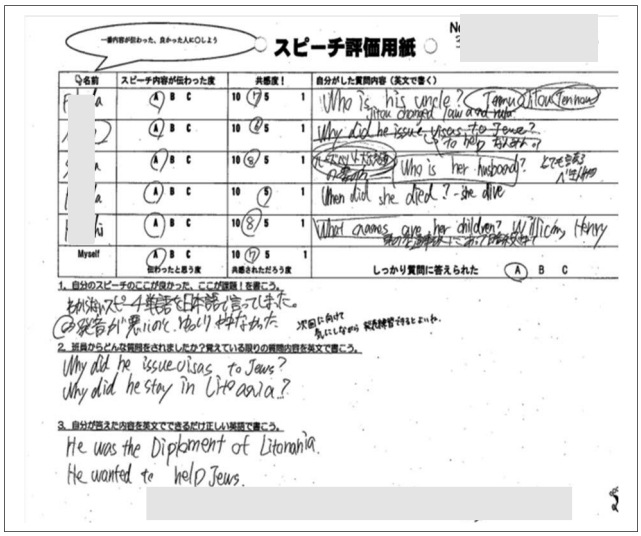

Writing sheet Topic: Nikola Tesla.

I respect Nikola Tesla. He was a science genius. 1
He invented alternating current.(交流電流) 2
Alternating current which was invented by him supports our life. 3
But he didn't become well-known. 4
It is because he and Edison were rivals. Edison covered 5
up great achievements Tesla completed. 6
Tesla was harassed by Edison many times. He hated Edison. 7
But he wasn't disheartened. I think he was a greater scientist than Edison. 8
After he left Edison's company, he invented many things. 9
For example radio control was invented by him. I respect his passion for science. 10
The Nikola Tesla museum which keeps his invention was 11
registered on UNESCO's World Heritage list. 12
I will try hard to study and become a great human like him. 13

◆先生からのアドバイス

文の数	多く書けています	目標はクリア	もっと書くと良い	
内容	良い内容	目標はクリア	もう少し濃い内容が欲しい	
単語ミス	スペルミスが多い	スペルミスあり	スペルミスあり	スペルミスなし（またはまだ習っていない単語なので今は OK）
単語選択ミス	間違った意味で使っている単語が多い	間違った意味で使っている単語もある	単語を正しく使えている	
文法ミス	文法ミスが多い	文法ミスあり	文法ミスあり	文法ミスなし（またはまだ習っていないレベルなので今は OK）
語順ミス	大きな語順ミスあり	語順ミスあり	語順ミスあり	語順ミスなし
不注意ミス	不注意ミス複数あり	不注意ミスあり	不注意ミスあり	不注意ミスなし

図 2　尊敬する偉人スピーチ原稿（生徒作品）


スピーチ評価用紙

名前	スピーチ内容が伝わった度	共感度！	自分がした質問内容（英文で書く）
[redacted]	A B C	10 9 5 1	Who is his uncle?
[redacted]	A B C	10 9 5 1	Why did he issue visas to Jews?
[redacted]	A B C	10 9 5 1	Who is her husband?
[redacted]	A B C	10 9 1	When did she died? - she alive
[redacted]	A B C	10 8 5 1	What names are her children? William, Henry
Myself	A B C 伝わったと思う度	10 9 5 1 共感されただろう度	しっかり質問に答えられた A B C

1. 自分のスピーチのここが良かった、ここが課題！を書こう。
2. 来賓からどんな質問をされましたか？覚えている限りの質問内容を英文で書こう。
Why did he issue visas to Jews?
Why did he stay in Lithuania?
3. 自分が答えた内容を英文でできるだけ正しい英語で書こう。
He was the Diplomat of Lithuania.
He wanted to help Jews.

図 3　スピーチ評価表と質問メモ（生徒記入）

(7) 授業を終えて

1 年生と比べると既習語彙が豊富でかつ社会的な内容を掘り下げて考えることができる 3 年生は明らかに CLIL 指導がしやすかった。教材内容を深く考えさせることができ，それが主体的なアウトプットにつながった。

CLIL 的な観点から授業を振り返ると，10 原則は概ね達成できたと考えている。右に，筆者の授業について各原則について確認する。

①内容学習と語学学習の比重は 1:1 である。

内容学習の中でターゲット文法である後置修飾の指導を行った。ほぼ同じ割合で入れることができた。

②4 技能をバランスよく統合して使う。

「聞く」「話す」「読む」「書く」をバランスよく統合できた。

③タスクを多く与える。

「アフリカ系アメリカ人の歴史の内容を読み年表を書こう」や「公民権運動の歴史を読みカードを時系列に並べよう」などがタスクにあたると考える。

④さまざまなレベルの思考力（暗記，理解，応用，分析，評価，創造）を活用する。

「暗記」「理解」としてペアでの教科書内容理解活動を行った。「応用」については,長文内容をもとにした活動や,歌詞の意味を考える活動などを行った。「分析」と「評価」においては,スピーチ発表後の評価活動がそれにあたると考える。「創造」においては,聴衆に関心を持ってもらえる内容のスピーチを考え発表した。

⑤協同学習を重視する。

ペア活動,4 人グループでの活動を必要時に行った。

⑥異文化理解や国際問題の要素を入れる。

指導のメインとして入れることができた。

⑦オーセンティック素材の使用を奨励する。

当時のアメリカで撮影された白黒写真や,アメリカの小学校の実験授業映像,キング牧師のスピーチ映像を英語音声,日本語字幕で視聴させた。オーセンティック素材を十分に与えられた。

⑧文字だけでなく，音声，数字，視覚による情報を与える。

英語インプットの視覚補助としての提示,情報を伝えるための画像提示等を行った。

⑨内容と言語の両面での足場を用意する。

難易度の高い英文は内容を図式化させたり,ペアや班で考えさせた。スピーチ発表は教師の模範を複数示すことで足場掛けを行った。

⑩学習スキルの指導を行う。

他の原則と比べると意識して入れられていなかった感がある。英語が苦手な生徒は部分的に日本語を使って自分の考えを伝えたり,パートナーや班員から表現法を教えてもらい課題を乗り越えていた。しかし授業者として,もっとできるスキル指導があったのではないかと考える。

４. アンケート結果

CLIL 指導に関してのアンケートを 1 月に, 3 年生 71 名を対象として行った。アンケート内容は, 年間を通して行った CLIL 指導に関してである。以下はアンケートの一部である。

1) 英語の授業の中で実際の映像や画像,それに伴う英語説明を受けることについて以下の質問に答えてください。
①教科書本文に書いてある内容以外のことも知ることができた。
「できた」(69%)
「ややできた」(25%)
「あまりできなかった」(1%)
「できなかった」(5%)
②題材に興味を持つきっかけになった。
「なった」(45%)
「ややなった」(35%)
「あまりならなかった」(10%)
「ならなかった」(10%)
③題材の内容を前より知ることができた。
「できた」(69%)
「ややできた」(29%)
「あまりできなかった」(1%)
「できなかった」(1%)
④題材から考え,学びをより深めることができた。
「できた」(56%)
「ややできた」(39%)
「あまりできなかった」(1%)
「できなかった」(4%)

多数の生徒が CLIL 指導において, 題材についてより多くの内容を深く知ることができ, 題材に関心を持つきっかけとなったと答えた。大多数の生徒が教科書題材にプラスした内容を英語で聞くことに肯定的である。次はアウトプットに関する質問である。

2)英語の授業の中で,実際の映像や画像を視聴したり,それに伴う英語説明を受けることは,英語で書く,英語で話す,ための助けになりましたか。
（2 択）
「助けになった」(76%)
「助けにならなかった」(23%)
無回答 (1%)

生徒の 76%がインプットした内容がアウトプットの助けとなったと回答した。「英語で書く, 話すための助けになった」と答えた生徒たちは, その理由として以下を挙げた。

・知識を広げることで意見を述べるときに主張の支えとなる根拠を十分に考えられるようになった。
・情報が多くある方が英語で書きやすかった。
・答えがないので自分で考えられたから。
・映像や写真を材料に意見を他の人に話せるから。
・内容についての感想や要約を英語でしなければならなかったから。
・イメージが持ちやすくなったので日本語から英語にするときスムーズにできた。
・キング牧師のスピーチなどはその授業の最後に私が尊敬する偉人を書くときにどのように書いたらよいかとても役立った。

一方, 「英語で書く, 話すための助けにならなかった」と答えた生徒たちは, その理由として以下を挙げた。

・知識は増えたけど英語力を伸ばすために必要な知識ではなかったから。
・英語を聞く助けにはなった。
・海外での出来事を知ることの興味が英語を書くことの興味より大きかったから。

生徒がアウトプットする際, インプットした内容を上手く活かすことができた生徒とそうでなかった生徒がいた。筆者の推測であるが, インプット内容を活かすことができた生徒たちは, 自然とインプット内容とアウトプット内容につながりを見つけていたこと, 先にあるアウトプットを見据えて能動的なインプットをしていたのではないか, と考える。

次は CILL 指導テーマに関する質問である。

4)英語の授業で他国の歴史,文化について知ることは・・
「楽しい」(45%)
「やや楽しい」(43%)
「あまり楽しくない」(11%)
「楽しくない」(1%)

9 割近くの生徒が他国の歴史や文化について知ることを肯定的にとらえている。

6)英語で異文化や他国の歴史を学ぶことについて思うことを書いてください。

・異文化を学ぶことは自分が外国人と交流するときにとても役立つことだしもっと学びたいと思う。
・英語は苦手ですが,異文化に触れることは興味を持つことにつながって良いです。
・社会科の勉強をしているときに英語で学んだこととつながることがあって良かったと思う。
・英語で話したり聞いたりしながら,これらを学ぶことは一石二鳥である。

多くの生徒たちが肯定的な意見を述べた。さらに定着については否定的な意見はなく,肯定的な意見のみであった。その一部を以下に掲載する。

・日本語で学ぶより定着感がある。
・日本に居ては感じられないことを知れるので学びが深まると思った。
・英語で学んだ方が日本語で学ぶよりも記憶に残りやすいと感じた。

筆者の推測であるが,生徒が英語での学習が記憶に残りやすいと感じたのは,英語音声の動画を視聴させたり,画像と英文をセットにして見せたりすることで内容のイメージが湧くようにしたこと,インプットを元にしたアウトプットの機会を何度も作ったことなどが理由であろう。ただ,理解度については以下のような否定的な意見もあった。

・新たな知識を増やせて楽しい。一方,英語表現は語彙が少ないなどの幅が狭いために得られる知識も限りがある。
・英語だと深い内容を知ることが難しい場合があるので,日本語で説明があると分かりやすい。

生徒の実情に合わせて日本語を補助として使うことも必要であろう。

5. 考察と今後の課題

筆者が行った CLIL 指導が能動的なインプットと主体的なアウトプットにつながったかを考察する。

3 年生の CLIL 指導では,9 割近くの生徒が授業者の英語インプットを「楽しい」または「やや楽しい」と感じたと回答したこと,約 8 割の生徒が英語インプットがアウトプットの助けになったと回答したアンケート結果から,生徒たちは能動的なインプットを行っただろうととらえる。アウトプットに関しても生徒の作品やスピーチ等の成果から伝えたい内容を自分で選び考え内容の充実した発表またはライティングができた。一方,1 年生では能動的なインプットが出来ていても,習得語彙と習得文法の少なさから主体的なアウトプットを行いきれない現実があった。このことから筆者は Krashen(1983)が主張した「インプット仮説」の正しさを再確認した。言語習得理論上,理解可能な大量インプットがアウトプットにつながると言われる。しかし昨今の英語教育はアウトプット重視の流れがある。新学習指導要領においても,インプットよりもアウトプットの方が重要視されている。このことから筆者は,インプットが大切だと信じつつも,本年度は早い段階からアウトプット活動に比重を置いた指導を試みた。しかしながら,インプットがないところからアウトプットは出来ないというのが筆者の再度の結論である。今後の指導ではインプットを中心に据えながら,アウトプットを段階的に入れていきたい。

次に,能動的インプットから主体的アウトプットへつなげていくためには,生徒の知的関心と英語力が合った内容を CLIL 指導テーマにすることが大切である。生徒がアウトプットで使用したい語彙や文法が生徒の持つ英語力を大きく超えると,たとえインプット時に理解できていても,アウトプット時にはその内容を使えない。よって授業者は,生徒の知的関心と英語力のバランスがとれた指導テーマを考えることが必要である。さらに加えて授業者は,生徒がインプットした英語を自分の言葉で伝える力をつけてやること,シンプルな英語で伝える方法を教えてやること,などの足場掛けをしながらアウトプットのヒントを与えることが必要である。

本年度は CLIL の 4 要素を有機的につなげ,10 原則に則った指導をしたことで,能動的なインプットを行うことが概ねできた。しかし主体的なアウトプットへつなげていくことは,生徒の英語学習段階によって難しく感じた。段階に応じたアウトプット活動を入れること,学習の手助けや学習スキルの指導を行うことが今後の課題である。研究を継続したい。

参考文献

和泉伸一・池田真・渡部良典（2012）『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦』上智大学出版
Krashen, S.D & Terrell, T.D.(1983).The Natural Approach. New York: Pentice-Hall
Schmidt,R.(1990).The role of consciousness in second language learning, Applied Linguistics,
Nation, (2001).Learning Vocabulary in Another Language, The Cambridge applied linguistics series